雨の夜

新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨の夜

【Ｎコード】
Ｎ０６７１Ａ

【作者名】
新

【あらすじ】
雨の夜、“僕”は不思議なものを見つける。それは、小さな女の子の形をした……。

（前書き）

思いつきで書いてみました。よろしかったら感想などを頂けるとありがたいです。

あれは雨の夜だった。僕は塾をサボった。
参考書で埋め尽くされたバッグを背負い、家のドアに鍵を掛けようとしていたとき。僕は本当に何となく、塾に行くのが嫌になった。勉強が嫌いになったのでも、他にすべきことが見つかったのでもなかった。今でもその理由を答えることは、できない。
だけど、僕は家の門をくぐった。行く当てなどなかった。塾以外ならどこでもよかった。
冷たい雨が降っていた。ビニル傘を持つ右手が冷たかった。何もこんな日に出歩くなんて馬鹿みたいだな、ってちょっと思った。だけど家には引き返さなかった。
歩道を歩く僕の脇を、車が水しぶきをあげて走り去ってゆく。

家を出て十分ほど歩くと、僕は変なものを目にした。

それは、黙ったまま雨に打たれていた。
道の端に倒れ、うつ伏せ、ピクリとも動かなかった。初めは、犬の死体か何かと思った。だけどそれはすぐ間違いだって気付いた。小さいながらも、それは人の形をしていた。全長２０センチくらいだったけど、足があり、手があり、そして頭があった。そうだったら、何かの人形だろうかと思った。
立ち止まり、僕はそれを拾おうと腰をかがめた。ビニル傘を肩で支えながら、道の端にうずくまった僕は、びしょ濡れになったそれを持ち上げた。思いの外に温かくて、正直驚いた。だけどもっと驚いたのは――

「誰ですか？」

人形は僕の方をくるりと向くと、その小さな口を開いた。
名前を聞かれたので、僕は自分の名を名乗った。
すると、それはニッコリと微笑んだ。生きている。
パズルを解くときのように、僕はそれをまじまじと見つめてみた。
スケールはものすごく小さいが、全体のバランス的には、人間の女の子に似ている。湿った髪の毛は、見事なまでに色素が抜け落ちている。ウサギの毛のように真っ白だった。日の光に当たったら、それは綺麗に光りそうだ。でも、今は悲しそうにしおれてる。
彼女はロールプレイングゲームに出てくる魔法使いのような、上と下が繋がった、だぼっとした服を着ていた。今は泥まみれになってしまっているが、もともとは真っ白だったのだろう。
そんなとき、僕の手のひらの中で、彼女はぶるっと震えた。

「大丈夫？　寒くない？」
「……ちょっと寒いです」
「それなら、ここ入れよ」

僕は、彼女の小さな身体を僕が着ているパーカーのフードの中に入れた。普段は使わないけど、やっと役に立ったような気がした。

「ありがとうございます」

耳元に近くなったからだろうか。さっきよりも、彼女の声が聞き取りやすくなった。
あ、そう言えば。

「君は何て名前？」
「わたしですか？」
「うん」

そのときだった。ほんの一瞬だけど、雨の音がやんだような気がした。

「――てる美」

小さな彼女は、確かにそう言った。

彼女を放っておくわけにはいかない。僕は歩いてきた道のりへと向き直った。

相変わらず、冷たい雨が降り続いていた。信号機のランプが濡れたアスファルトの上で、まるで滲んだペンキのように反射していた。車がそれを引き裂いてゆく。

「明日は晴れるといいなぁ……」

思わず僕はそう呟いた。だけど、何の返事もなかった。

……

僕は家へと帰った。三十分くらい前に閉めたばかりの鍵を開けようとすると、がちゃと無機的な音がした。僕を出迎えてくれるのは沈黙のみだ。「おかえり」の声など、僕にはない。お父さんもお母さんもいない。誤解されては困るが、仕事で、今は家にはいないという意味だ。僕も「ただいま」という意味がない。僕にとってこの建物は、家であっても家庭ではない。

ビニル傘を折り畳む。上下に振ると、慣性によって水しぶきが飛んだ。一通り水気を取り終えると、僕はそれを傘立てに無造作に立てかけた。

「おうちに着いたんですか？」

パーカーの中から、てる美が僕に話し掛ける。多少寝ぼけた声だった。多分、今まで眠っていたのだろう。ここまでに至る道のりで、雨音に混じり、時々寝息が聞こえていた。

「ああ」

「素敵なお家ですね」

パーカーが引っ張られることによって、僕の首にてる美の体重が掛かる。それによって僕は、彼女の動きを感じる。てる美は今、ちょこんと顔を出しているようだ。でも、鏡でも見ないと確認することはできない。僕が後ろを向くと、パーカーは元あった方と逆を向くから。当然だけど。

「そうか？」

「ええ、とっても」

てる美が僕の家の何を見てそう思ったのかは知らないが、取りあえず僕は、てる美を自分の部屋へと連れて行った。

……

てる美をフードの中から取り出し、僕は勉強机の上へと彼女を置いた。それから、上着代わりのパーカーを脱ぐ。案の定、フードの中は、彼女の泥だらけの服によって同じように泥だらけになっていた。まあ、別に洗うのは僕じゃなくて洗濯機だけど。

「それ、洗った方がいいよね？」

僕はてる美を指差す。もちろん、僕が言っているのは濡れネズミ

になったてる美の服だ。曇り空のような色になっている。
ところが、彼女はかぶりを振った。
「大丈夫ですよ。少しくらい汚れていても」
「いや、尋常じゃないくらい汚れてると思うけど」
「そうですか？」
僕はてる美にタオルを一枚差し出した。
「……あっち向いてるから。そんなんじゃ風邪引くぞ」
てる美の上にタオルを被せた。そして僕はてる美に背を向ける。
しばらくして、がさごそという音が聞こえてきた。
真っ暗な部屋。帰ってきたらまず電気を付けるという習慣は、僕にはなくなってしまったようだ。踏切の音は先程からずっと響き渡っているのだが、聞き慣れた所為か今まで気付かなかった。僕の家のすぐ裏を走る鉄道の光が通り過ぎ、ドアのある方の壁に映った僕の影が、走馬燈のように流れていった。
「……あの」
完全に電車が過ぎ去った後だった。踏切の音も、一つのリズムの外れた余韻を残してぱたりと消えた。僕は振り向く。そこには、タオル一枚にくるまったてる美がいた。
てる美が脱いだものを、僕は持ち上げた。ずっしりと重く、冷たかった。
「適当にその辺にすわっててて。すぐに洗ってくるから」
……

僕のパーカーは洗濯籠の中に放り込んだ。ここに入れておくだけで、いつの間にか部屋のクローゼットの中には洗濯済みの洋服が並べられる。便利なものだ。

てる美の服は僕が手で洗う。それにしても、不思議な形をした服だった。何て言えばいいんだろう。どこかの国の民族衣装で、これに似てるのがあった気がする。

水道水ですすぎながら、ちょっと手に力を入れると、墨汁のような真っ黒い液が流れた。そんなとき、僕は思った。

この服は、どれほど多くの汚れを吸い込んだのだろう。

数十分水の中でゆすいだのち、それはびっくりするほど真っ白になった。僕が小さいとき、新潟に住んでいた頃に見た初雪を思い出した。

……

「てる美、綺麗になったよ」

一通り洗ったあとは、ドライヤーで乾かした。

自分の部屋へと戻った。相変わらず電気が付いてない暗黒の空間ではあるが、大丈夫。今日は月が綺麗だ……。

「あれ？」

僕は窓を開けて身を乗り出した。僕とてる美を濡らした雨はいつの間にか上がり、雲の切れ目から、明るい月が、満面の笑みで顔を出していていた。ゆで卵を真っ二つに切ったような、まん丸い月だった。

「あの……ありがとうございます」

彼女の声に気付き、僕は振り向いた。僕はてる美に服を返す。

てる美はタオルの中から、真っ白くて細い腕を伸ばし、それを受け取った。身にまとっていたタオルの中で、頭からその服をかぶった。顔を服の首もとから出したとき、水から上がった時のように「ぷは」と息を吐いた。そして、何か安心したような穏やかな表情へと変わった。

てる美は僕を見上げた。ガラスのような澄んだ瞳が、じっと僕の顔を見つめていた。

「一つだけ……質問をしていいですか？」

てる美は言いにくそうにいった。

「なに？」

「わたしのこと……なんとも思わないんですか？」

「どういうこと？」

「ほら、わたしあなたに比べてちっちゃいし、それに……」

「それに？」

「う～んと、え～っと、つまり……」

てる美は困ったように首を傾げる。

「……何でわたしみたいなのがいるのか、不思議じゃないんですか？」

「別に」僕は即答した。

「どうしてです？」

風船の口が緩むように、僕はフッと息をもらした。

「その質問を僕にされても、答えられないからかな」
「えっ？」
「『あなたはどうしてここにいるんですか？』。そう聞かれたら、僕だって答えらんない。だから君のことも、不思議に思わない。分かった？」

うつむき、少し考えて、
「分かりました」てる美は言った。
僕はもう一つ笑みをもらした。
それにしても、窓の外がやけに明るい。僕はまた、窓の方へと目をやった。
「明日は、きっと晴れますよ」

てる美が言った。
「天気予報では雨って言ってたけど」
「大丈夫です」
「分かるの？」
「はい、分かります」

そう言うと、てる美は僕に背中を向けた。
「すみません。わたしをつるしてもらえませんか？」
「つるすって？」
僕は彼女の首辺りに目をやった。洗ってるときは気付かなかった

けど、不思議な形をした彼女の服には、小さなわっかが付いていた。キーホルダーのぬいぐるみのようだった。
てる美の身体を持ち上げると、僕はカーテンレールの端っこに彼女のわっかを引っ掛けた。

「これでいいの？」
「はい」

僕が手を離すと、てる美はぶらりと宙に浮く。人形が女子高生の鞄にぶら下がるように、てる美は僕の部屋の窓枠にぶら下がった。不謹慎な言い方をすれば、首つりみたいな状態になった。

「明日は、きっと晴れますよ」てる美は、もう一度言った。
「そうか。晴れるといいな」

月明かりに、てる美の白い髪がきらきら映える。細かい一本一本が光を浴び、お互いに反射し合い、きらきらきらきら輝いていた。

……

いつの間にか、僕は眠っていた。
明くる日、まぶしい朝日によって僕は目を覚ました。ゆっくりと身体を起こすと、真っ青な朝空が目に入ってきた。

そして、てる美はいなくなっていた。

あれ以来、僕は雨が降るたびに思い出す。
一人の小さな、てるてる坊主のことを……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0671a/

雨の夜

2010年12月10日07時31分発行